

穏やかな言葉

校 長 宅島 健司

今現在、新型コロナウイルスが世界を席卷し、日本でも感染者が急激に増えて9000人を超え、各地でクラスターが発生している状況です。そういう中であって、本校でも時差・分散登下校等を実施し、文部科学省・県教育委員会の通知に則った様々な配慮を行いながら、授業を再開しましたが、緊急事態宣言を受け21日(火)から臨時休校とします。通常の生活がいかに恵まれていたかを改めて強く感じているところです。これまでの平常の学校生活や教育活動を愛おしくさえます。

さて、そのような中、TVやネットで使われている言葉の攻撃的なこと。余裕の欠片もない剥き出しの言葉が行き交っています。聞いたり読んだりして嫌になります。誰かを悪者扱いしなければならぬと決まっているかの如く、激しくて過激な言葉が使われています。生死にかかわる緊急事態であればこそ、立場や地域や仕事や資質等によって、考え方は異なります。調整による意見の一致をみることは難しいと考えます。こういう時に必要なことは、穏やかな言葉で思いやりの心で考えや意志を伝えることではないかと思えます。人同士の接触を避ける必要があるので、外出をできるだけしないようにしなければなりません。こういう時だからこそ、なおさら家庭での和みは不可欠であると思えます。自分の我を抑えつつ、和む雰囲気を作り出す工夫が必要だと思えます。家で我を張ってませんか、学校で自分の都合や我を出していませんか。一人一人や、一つ一つの家庭がこの状況に無関心になることなく、自我や我欲を抑えつつ、穏やかで和やかな雰囲気を醸成することに努力することが大事なのではないかと思えます。そういう心がけで生活している、我を出さなかった自分や仲間や家族を認め、誇らしく思うことで自尊心の満足につながるのではないかと思えます。簡単なことではないと思いますが、危機だからこそ、人同士が支え合い励まし合う必要があると思うのです。

ところで、私の教員生活の中でどうしても忘れられない生徒のことを書きます。3年間授業を担当しましたが、その生徒は3年間誰より私の唇を見つめ続けました。なぜなら、彼女は耳が聞こえないからです。笑顔を湛えながら私の顔を注視し、授業に参加していました。高2の時から彼女のクラスの授業に行く時にはマイクを使っていたのですが、彼女の読唇は続けました。当時の担任の話では、受信機を使って音声は届いていて、シグナルとして聞こえているけれども、その意味を判別することはできていないのではないかということでした。発音は少し不明瞭な部分はありましたが、問題なく会話は成立しますし、何より笑顔の絶えない明るい性格で、部活動も運動部のマネージャーとして頑張っていました。

定期テストですが、1年次に数学で学年1番を取ったことがあります。その学年は、受験では京大1、大阪大1、名古屋大2、九大8で、国公立大は160名ほど合格した学年でした。そんな中、学年で1番を取るほど努力をしていたのだと思えます。耳が聞こえないという障害がありながらその子を育てた親御さんを心から偉いと思っていました。家族一緒にファミレスで談笑しながら食事している時に遭遇したことがあります。笑い声が漏れ聞こえ、何とも明るい食事風景でした。しかし、その子を育てたお母さんが、彼女が高校を卒業してすぐにお亡くなりになりました。葬儀の時、体を震わせて泣いている彼女の姿が忘れられません。涙が溢れて止まりませんでした。神様は何てことをしてくれたんだとも思いました。でも、その時、ふとお母さんはこの子を育てるためにこの世に生を受けたのではないかと思いました。耳の聞こえない我が子を健常者と同じように育てるため、毎日5時間以上つきっきりで言葉を教え、勉強を教えたのだそうです。彼女は今、ある旅行業者で勤務しています。電話応対はできませんが、上司の言葉を借りれば、旅程の計画や旅費計算は、正確で誰よりも速いのだそうです。

人の生には意味があり、その人はその人なりの役割を担って生を受けている。あなたの生には意味があり、価値がある。それを探す旅が、それを活かすことが人生なのではないかと思えます。価値のない人なんていない。きみは今自分の役割や意味を探す努力をしていますか。自分の意味を活かしていますか。世の中がこのように時だからこそ、自分を磨くことを忘れないでほしい。自分の生を大事にしてほしいと切に思えます。

1年生は、入学したてで高校生活もよく分からない状況だと思えます。2・3年生も含め先生方の指示を真摯に受け止めて、課題に取り組んでください。この期間の課題は授業と同じ意味を持ちます。